



地域のランドマークとして佇む桃介橋

土木遺産の香 第83回

廃橋の危機から100年前の姿に甦った「桃介橋」 長野県南木曾町



株式会社オリエンタルコンサルタンツ/都市政策・デザイン部
井村 優花 / IMURA Yuka
(会誌編集専門委員)

100年の歴史を持つ桃介橋

「桃介橋」は木曾川の中流域、長野県南木曾町に架かる大正期の吊橋である。木製補剛トラスを有する4径間の橋で、橋長248m、高さ約13mの主塔、幅員2.7mと大正期としては最大級の規模をもち、建設当時は東洋一の吊橋と称された。鉄筋コンクリートの主塔を持つ吊橋として極めて初期のものに属し、現存する戦前最大の木製補剛トラス吊橋と目されている。

桃介橋は読書発電所建設時の工事用として、1922（大正11）年9月に架設され、トロッキのレールが敷かれていた。

1950（昭和25）年に当時の所有者であった日本発送電株式会社から、地元の読書村（現在の南木曾町）に寄付された。その時点で、木製部の耐久寿命を超える築後28年に達していたが、小規模修

理を加えるだけで使われ続け、傷みが激しくなった1978（昭和53）年に通行禁止となった。さらに1983（昭和58）年の異常出水で耐風索が破断したことで、建設以来60年を経て完全に使用不能の状態に陥ったのである。

しかしその10年後、桃介橋は建設当時の外観で復元され、地域住民の生活道そして地域の観光資源として再び脚光を浴びることとなった。なぜ、廃橋・撤去の危機に瀕した桃介橋は復元されたのだろうか。

読書発電所の建設と桃介橋の架橋

読書発電所は桃介橋が資材運送のために架橋された翌年の1923（大正12）年末に完成した水力発電所で、大同電力株式会社の創業社長である福澤桃介が進めてきた「木曾川一環水力開発」の中



完成直後の桃介橋



完成当時の読書発電所



桃介橋と発電所等の位置図

核的存在であった。読書発電所の建設は、明治大正期に培われた水路式発電所の技術の総決算であった。

建屋には最新式の発電機が格納され、導水路にはかつてないほど大規模で壮麗な水路橋が築かれた。本来ならば工事用の吊橋に過ぎない桃介橋だが、社長の名を冠しただけあって、他の工事用の吊橋より格段に大きく、優れたデザインのもので造られた。他の橋は橋長120m程度で2径間の単調な吊橋で、機能性を優先させた主塔しか造られなかったのに対し、桃介橋は橋長248m、4径間、斜索（ステイ）が張られ、河原へ降りる階段のついた装飾的な主塔を持つ、見栄えのする巨大橋として設計されたのである。

後年「日本の電力王」と呼ばれた福澤桃介は慶應義塾卒業後、福澤諭吉の婚養子となった実業家である。木曾川を自ら歩いて調査し、その潜在的な可能性を確信して木曾川の水力開発に乗り出した。読書発電所の工事関係者が来訪した際の宿泊施設を兼ねた別荘、現在の福澤桃介記念館も建てている。明確なことは判っていないが、そこにはアメリカ人技師が約2年滞在して建設指導したとされ、桃介橋のデザインにも関与していたと考えられている。

実は、読書発電所の工事用として計画された吊橋は3つあった。発電所直近の島田吊橋、1,600m上流の導入路工事現場に直結する沼田吊橋（現桃介橋）、それに最上流部の水路アーチ橋近くの柿其吊橋である。島田吊橋と柿其吊橋は架け替えや廃橋となり現存していない。沼田吊橋は1921（大正10）年10月に施工許可が下りていたが、その後間もなく架橋地点の左岸側用地買収が難航したことで、上流側に236m移動することとなった。移動先が広い中洲のある地点だったため、1径間吊橋から4径間吊橋へと拡大され、全長も248mへと倍増した。



特徴的なデザインの主塔と大人の背丈ほどの高さの補剛トラス



木曾川右岸の中央アルプス展望台から望む

その後名前も桃介橋と改められることとなった。

桃介橋の老朽化と修理

桃介橋は発電所建設後、村人が自由に通行できる生活道として長らく利用され、架橋から28年後の1950年に読書村に寄付された。その後10年間で徐々に老朽化が進んだと想定されるが、1959（昭和34）年から翌年にかけて読書第2発電所の建設工事が行われた際に修理されている。1961（昭和36）年にはさらに老朽化が進み、小型車の通行は禁止され、人と2輪車だけを渡す橋となってしまった。

また、下流側に恒久的な南木曾橋を架ける計画が持ち上がり、完成後の桃介橋の取り扱いについては、保存と撤去の両論が出された。1964（昭和39）年になると、桃介橋の歴史的な意義や観光的な価値を認めて永久保存を求める請願も出された



トロッコレール跡を模した桃介橋の橋面



橋から河原へ降りるための階段

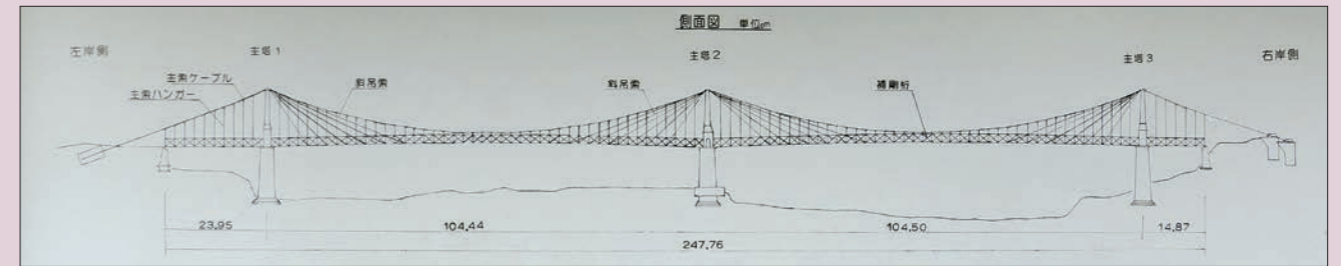
が、事故の起こらない程度の修理を続けることで結論は先送りにされた。そして、抜本的な修理が行われないまま年数が経過し、1971（昭和46）年には通行止めが検討され、翌年4月には、最後の対症療法として床板の中央部に1.0mの板を敷いて臨時の通路とする簡易工事が行われた。しかしそれも5年の延命に過ぎず、1978年には通行止めの措置が取られた。以後、修理等の対策が取られることなく、復元まで通行止めが続いた。

修復・復元のきっかけ

桃介橋が修復・復元への道を歩み始めるまでには、さらに3つの出来事があった。

最初の大きな出来事は、橋の再生を希望して、1977（昭和52）年12月に南木曾町の全人口の47%にあたる3,286名の住民による請願が出されたことである。これを受けて、南木曾町議会の商工委員会では、桃介橋の文化的・観光的な価値を生かすための方法について、種々検討が行われた。しかし、大正期の桃介橋に文化財としての価値を求めるのは時期尚早との指摘があり、文化財を前提とした修復・復元の案は宙に浮いてしまった。そのため桃介橋の通行止めはそのまま継続された。1983年の台風10号による異常出水で耐風索が破断し、改修も撤去もできない廃墟として存在し続けることとなった。

次の大きな出来事は、1988（昭和63）年に自治省（当時）のふるさとづくり特別対策事業制度が創設されたのを機に、南木曾町で桃介橋の修復問題が再燃したことである。桃介橋の復元を盛り込んだ「大正ロマンを偲ぶ桃介記念公園整備事業」の構想がまとめられ、一部有志から「桃介橋復元」の陳情が出された。これを受け町議会では、1989（平成元）年1月から桃介橋の復元問題について審査を開始し、橋の歴史的な価値を認めたいと、早急に調査を行い復元の是非を決めることとなった。その後も事態は急速に展開し、翌年6月には桃介記念公園が1990（平成2）年度のふるさとづくり特別対策事業に指定された。桃介橋をどうするかについての



桃介橋側面図（現地概要説明板より）

具体論が煮詰まる前に、公園計画が本格的に動き出したのである。その後の桃介橋の調査では、1984（昭和59）年発行の小規模吊橋の設計基準に適合するレベルまで強化・改造するべきという結論が出されたことで、桃介橋の完全復元を目指す動きは宙に浮いてしまった。

最後の大転換は1991（平成3）年11月に起きた。1990年度にスタートした文化庁・建造物課の近代化遺産の概念が桃介橋にぴったり当てはまること、さらに小規模吊橋の設計基準にこだわらなければ桃介橋を旧状通りに復元できる可能性があることが指摘されたのである。これにより桃介橋をめぐる論議は180度転換し、文化庁の指導の下に文化財として本格的な復元を目指すこととなった。その背景に、妻籠宿を日本初の重要伝統的建造物群保存地区の選定に導いた南木曾町の歴史に対する深い愛着と誇りがあったことは確かである。

近代化遺産としての復元

近代化遺産としての桃介橋の高い評価に鑑み、文化財にふさわしい修復を目指すことが期待されていたが、安全性や維持管理を重視する土木工学の立場と、オリジナルに忠実な復元を原則とする文化財の概念の間には、大きな隔たりがあった。そこで、桃介橋保存・活用検討特別委員会を発足させ、土木文化財の修復・復元の在り方について議論した。

委員会は桃介橋を構成する鋼構造部、コンクリート構造部、木構造部について、各部材ごとに土木工学的見地からの構造診断を行い、それぞれ最適と思われる文化財にふさわしい改修方法を提案した。こうして得られた近代土木建造物の修復・復元に関する知見は、土木工学・文化財の双方の分野にとって貴重なものとなった。復元後は、桃介橋保全管理計画に基づき保存・活用を行っている。



福沢桃介記念館に保管されている復元前の橋の一部

地域のランドマーク

桃介橋は現在、JR南木曾駅と集落をつなぐ住民の生活道として利用されるとともに、南木曾町の観光地の目玉として多くの人が足を運ぶ場所となっている。橋の近くにある福沢桃介記念館は、コロナ禍以前は1日1,000人以上が訪れることもあったほどの観光施設である。

桃介橋をはじめ、読書発電所や現在は福沢桃介記念館となっている別荘など多くの施設や遺構がここ数年で完成から100年を迎える。ランドマークとしてあり続ける桃介橋を渡り、地域の歴史を想像してみてもはどうだろうか。

<参考資料>

- 1) 『桃介橋修復・復元工事報告書』南木曾町・南木曾町教育委員会 1994年10月
- 2) 『桃介橋保全管理計画』南木曾町 1994年4月
- 3) 『桃介橋—文化財としての修復・復元』後藤和満他 土木史研究第12号 1992年 土木学会
- 4) 『木曾谷の桃介橋』鈴木静夫 1994年 NTT出版

<取材協力・資料提供>

- 1) 南木曾町教育委員会
- 2) 福沢桃介記念館

<図・写真提供>

- P40上、P41下、P42上写真：井村優花
 P41上左写真：福沢桃介記念館
 P41上右図、上左下写真：南木曾町教育委員会
 P42下左写真：高橋真弓
 P42下右、P43中写真：塚本敏行